

# パリ滞在記 ～マダムと呼ばれた二年間～

特許庁 審査第一部 情報・交通意匠 審査官 坂田麻智

昨年秋発行の「Japio YEAR BOOK 2023」で経済協力開発機構での業務（知財データ分析等）についてご寄稿くださった坂田麻智氏に、「DESIGN PROTECT」ではパリ滞在中のあれこれを綴っていただきました。日常生活やフランスのデザインはどのようなものだったのでしょうか。

## はじめに

筆者は、2022年1月末から2年と1か月間、フランスのパリにある、経済協力開発機構（以下、「OECD」という。）に出向する機会を得た。OECDは、ヨーロッパ諸国を中心に日・米を含め38か国の先進国が加盟する国際機関であり、世界最大のシンク・タンクといわれている。OECDでの筆者の業務内容については、一般財団法人日本特許情報機構発行のJapio YEAR BOOK 2023にて、「知的財産データを活用した統計分析－Statistical analysis using intellectual property data」\*<sup>1</sup>としてまとめているので、そちらの内容を参照されたい。

本稿においては、フランスでの生活の様子やフランスのデザイン・美術などについて、紹介させて頂きたい。

\* 1 [https://www.japio.or.jp/00yearbook/files/2023book/23\\_1\\_07.pdf](https://www.japio.or.jp/00yearbook/files/2023book/23_1_07.pdf)

## 1. OECDでの働き方

筆者が在籍していたOECD事務局には3000名超の職員が働いていたが、女性職員も多く、特に印象的だったのは、管理職に非常に女性が多い点だ。

また、日本人職員は100名以上在籍していたが、筆者のような日本の省庁や民間企業からの赴任者では、女性の赴任者が年々増えており、子供を連れてのママ赴任の人にも多く会った。筆者自身も夫と二人の子供（4歳、2歳）を連れて

の赴任であったが、ママ赴任の場合、夫が仕事を休職するパターンか現地でテレワークを行うパターンが多かった。テレワークが普及したことによって、このように男女問わず働く場所の自由が得られるのは、コロナ時代の良き遺産だと思う。

OECDにおいても、テレワークは非常に普及していた。筆者が着任した当初はフランスではコロナが猛威をふるっており、100パーセントテレワークでの業務であった。フランスにおけるコロナの状況が落ち着いた後は、週の半分以上は出勤することが推奨されていた。OECDにおいては、世界中の関係者が参加する国際会議がよく開かれており、そのような会議においては、オンラインとインパーソンのハイブリッドで行われることがすっかり定着していた。

### ●写真1 OECDの建物入口

